

**IAML Annual Conference
Sydney, Australia July 1-6 2007
2007年国際音楽資料情報協会国際会議報告**

荒川恒子

IAML日本支部長として、連続5回目の会議出席であった。今回の大会の新しい体験は、初めての南半球、IAMLが日頃交換している音楽情報の中心地から、遙かに遠くにある国への旅行であった。入国の手続きが事了他厳しく、多少不可解な念を持ったが、珍しい動植物に接して、それらの自然体系が変わらないように、しかし人間が行き来することを妨げないための配慮がなされていることに気づき、強い共感を持った。会場となったシドニー音楽院は、冬だというのに限りなく青い海辺に広がる植物園の一角に建っている。そこにけたたましい叫び声を発し、不思議な形、色、動きをした鳥達が自由に飛んでいるのを目の当たりにして、私の想像を絶する都市にきたことを実感した。

今回はヨーロッパやアメリカ勢にとっては、飛行機でも途中で1泊ないしは2泊はかかる長旅でもあり、外国からの出席者は少なめであった。しかしIAML支部が置かれている場所、状況を知りながら、意見を交換することこそ、この会議の目的のひとつである。広い領土を有する国であるにもかかわらず、シドニーのシティと呼ばれる中心部は、すべて歩いて行けるほどコンパクトで、しかもアップ・ダウンが激しく、この国は海にへばりつく狭い土地にしか住める場所がないこと、非常な乾燥地帯で海沿い以外は砂漠で、生活することが困難であることを実感した。今回の会議の準備がどれほど大変なものであったとか、改めて考えさせられた次第である。地図上ではシドニーのすぐ近くにあると見えるメルボルンまでも、飛行機で1時間半ほどかかるのである。つまり東京から九州あるい

は北海道ほど遠いのである。参加者一覧表から、広いオーストラリア各地から大学、音楽院、放送関係の図書館員また出版関係の方などが計91名出席していることがわかる。日常的に彼らは交流することがある、あるいはできるのであろうか。

総会での会長 Massimo Gentili-Tedeschi 氏の挨拶も、普段国際会議に出席がかなわない多くのオーストラリアのメンバーが、心を込めて準備してくださったことへの感謝の言葉で始まった。なお今年は執行部の改選の年である。新会長には、今まで冷静、沈着に会計を務められたオランダのMartie Severt 氏が選ばれた。事務局長は素晴らしい実務家ニュージーランド国立図書館の Roger Flury の留任である。長い時間をかけてのディスカッションは、紙媒体による『Fontes』の今後のあり方に関してであった。遅れに遅れていた雑誌刊行は、編集者Maureen Bujaの実行力をもって、正常化された。しかしそれはまた、一時的に会計を圧迫する要因にもなったのである。賛否を取る前の最後の意見聴取に際して、若い図書館員が「自分の最初の仕事は、電子媒体からプリント・アウトすることであった」と述べ、苦笑を誘った。今後は手にした雑誌から偶然に、間接的な情報を得ることがしがたくなるのかもしれない。仕方のないこととして受けとめつつも、目に見えず実感の湧かない情報の海の中で、受け手がバランスよく目配りをするのが、求められることであろうとの感を強くした。なお2009年から団体会員は1ユーロ、個人会員は0.5ユーロ会費が値上がりすることとなる。かなり細かい数字である。経済問題は微妙なものである。

各国の支部報告は総会から切り離され、重要な事項として扱われている。月曜日の夕方がその時間にあてられた。私は、1)5月の総会で総括された、この1年間の日本支部の行

事内容、2)メンバーが多少世代交代し、活発な活動に希望がもてること、3)懸案になっているRISM組織化はまだできていないが、準備のための動きがあること、4)公共図書館や大学図書館の人事配置替えの際、図書館員が専門職として扱われない場合があり、憤りと悲しみを覚えること、5)日本支部のメンバー構成として、図書館現場の方ばかりでなく、音楽学者を初めとする大学の教員スタッフが多いこと、彼らと共に日本支部らしいあり方を模索していきたい旨を報告した。なおオーストラリアではIAMLのことを単に「音楽図書館協議会」と称していた。それがこの国のメンバーの実態に即しているのであろう。実際多くの支部では、図書館スタッフが日頃情報の入手、発信、カタログ作成およびそれらのツールの模索等に関しての共同活動をしているのである。例会を持ち、興味深い講演を聞くことに関しては、日本支部のメンバーも人後に落ちないと確信する。しかし我が国でも、情報の共有化のための相互の努力や工夫に関して、より多くの意見の交換と行動が必要ではないか、日本支部のあり方を考える材料を与えられた。もつとも会長は、各国支部の相違をそのまま受けとめ、尊重する態度を示し、支部活動の重要性を強調された。

今回の会議の内容に関して、御紹介しておきたい。本年はオーストラリアからのレポートが多いことは、お手元にある事前の御案内からお分かりの通りである。いずれもこの国の地理上の条件、建国の歴史と深く結びついた実情を反映したものである。まず現代社会に共通の課題であるが、特に広い領土に人間がまばらに住んでいるため、情報の入手が困難なオーストラリアでは、ネットを用いるツールの開発に熱心なことは当然である。オーストラリア国立図書館と50以上の組織が共同で構築した MusicAustralia (www.musicaustralia.org)は、すでに出版されたものから、今まさにヒットしている作品までも、各ジャンル、様式、形式等から検索し、入手して検討することのできるツールである。この特徴はビジネス、芸術、研究、文化、インフォメーション等の分野を結びつける革新的なものである。一度アクセスをお勧めしておこう。また2006年に『Observer』が、世の中を変革させた15のウェブ・サイトを紹介したことが報告された。図書館もサー

ヴィスの向上を拡大するために挑戦し、音楽や音楽情報の発信のために、そのようなサイトを積極的に利用すべきではないかとの提案がなされた。主として原住民が住む、交通の便の極端に悪いノーザン・テリトリーの図書館員は、そのような土地だからこそ、図書館が住民の教育の補助をするためのプログラムの開発に勤しんでいる旨を報告された。また Libraries Australia はオーストラリア全土にある国立、州立、大学、公共図書館など様々の全800の図書館が25年間協力しあい、オーストラリアおよび外国の情報を入手、使用できるシステムを構築したことを紹介された。そのような文脈の中で、日本からの発表として伊藤真理さんは、日本の公共図書館とユーザーの関係、ユーザーからのニーズの調査、またそれに応える公共図書館の試みの実例を示し、分析を加えて説明され、聴衆から関心と共感を持って評価された。

口承文化、消滅の危機に直面している文化の保存、紹介のための試みが説明された。太平洋とアジア地域(マレーシア、パプア・ニューギニア、日本、韓国、ヴァヌアツ、フィジー、タヒチ、ラパヌイなど)の、言語や文化の収録、記録、保存するための、組織を超えた取り組みである PARADISEC と DELAMAN アーカイヴに関する解説、アボリジニの歌の記録への取り組み等が紹介された。楽譜ばかりでなく音源にアクセスするための工夫にも触れられた。またオーストラリアの図書館が所蔵するコレクションの説明がなされた。ブリテンとの深い関係を示すものとして、ヴィクトリア州立図書館のグスタフ・ホルスト・コレクションとヴィクトリアのブリティッシュ音楽協会コレクションの成立事情、内容、価値への言及がなされた。これらは20世紀の二大世界戦争間の時代におけるメルボルンの音楽研究に重要なものである。現在はメルボルン大学へ寄贈され、電子化されアクセスが可能となっている。メルボルン大学が所蔵するイギリスの作曲家 E.J.Moeren(1864-1950)の軌跡、国立大学が楽譜を所蔵するオーストラリアの代表的作曲家 Peter Sculthorpe の作品一覧と伝記について、オーストラリアにおけるユダヤ音楽のアーカイヴについて等が紹介された。また原住民と移民の文化の交流、影響関係などに関する研究として、スコットランド音楽が、早

い時期にオーストラリアの民謡に与えた影響等の分析や研究も紹介された。原住民とヨーロッパ大陸から移住してきた人々の間の軋轢から共存へ、それぞれの民族のルーツに関わる音楽文化の尊重、交流により生じた新たな局面、さらには多民族、多文化国家へと変貌するために、周辺オセアニアから日本にまでおよぶ太平洋に点在する国々の文化への関心の高さが示された。そのような脈絡で考えると、茂手木潔子氏が「日本伝統音楽のサヴァイヴァル」と題して、多くの身近な道具を楽器として生かす日本の音楽のありかたを、自らのデモンストレーションを加えて説明されたのは、大いに時機を得たものであった。7月3日に行われたコンサートでは、「オーストラリアの昔と今の音楽」と称し、ピアノ、弦楽四重奏とアボリジニの奏するディジュリドゥの共演で、Peter Sculthorpeの作品が、また7月5日にはガムラン演奏とAnne Boydの作品が熱演された。なお演奏に先立ち、Anne Boydは日本の音組織やメンタリティや風情からインスピレーションを得て作曲した旨を講演された。

ヨーロッパと強い結びつきを持つ住民の存在も無視できない。2002年から2007年にかけてシドニー大学で入手した、たぶんスペイン起源と考えられる典礼歌の8つの手稿譜の紹介、オーストラリアのふたりの学者によるトレド大聖堂の170の単声歌（1503、1539、1580、1600、1649、1790、1809年の目録）の解説と写本研究の紹介がなされた。このような内容は、オーストラリアの研究者にとっては、稀なる業績ということである。Louise Hanson-Dyer といえ、1929年から1931年に、パリで精力的に15世紀から19世紀の楽譜、特にフランス・バロック音楽、古典派のオペラ、イタリア・ルネッサンスのミサ曲を収集し、長じてL'Oiseau-Lyre出版社を創設した人として、我々には親しい存在である。しかし彼女はメルボルンに生まれ、パリに移住する以前には夫と共にメルボルンの文化界に貢献したのである。夫はブリティッシュ・ミュージック・ソサイエティのヴィクトリア支部を創設したり、アリアンス・フランセーズのプレジデントを務めたのである。夫妻とオーストラリアの関わりに脚光をあてた発表であった。なお妻ルイズの楽譜コレクションは、今ではメルボルン大学に寄贈されてい

る。

これらの話のほとんどは、私の関心事ではなかった。聞き取りがたいオーストラリア英語、しかも人前で発表したり、マイクを使用することにあまり慣れていない発表者の発表内容を理解することは、筆者にはかなり難しいものがあつた。しかし本報告のためにレジュメを読み返し、あの1週間を全体として振り返るだけの時間が経った今、オーストラリアの図書館員の仕事振りを思い返してみると、心の熱くなる気持ちが膨らんでくる。あの国の持つ歴史、地理的条件、人々の営みや教育の中で、図書館の果たす役割には非常に大きいものがあるはずである。事実若い図書館員の卵たちによる、仕事の課題に関する白熱したディスカッションの時も持たれ、彼らを指導する先輩の前向きな態度や姿勢から、図書館の存在の重要性に関して、多くのことを学ばされたと気付いたからである。

例年かわされる情報交換は比較的少なかった。しかしRISMの本部から、情報提供に関する新しい方式が説明された。IAML日本支部のホーム・ページ<http://www.iaml.jp/>から入り、国際プロジェクト、そしてRISMへと進みNews & Congressesを開けると、最初に目につくのがKallisto-Tutorialsとその手引きである。これは2007年6月に更新され、目下ドイツ語版しか載っていないが、まもなく英語版でも掲載されると書かれている。まずシドニーで、そしてチューリヒの国際音楽学会でも説明されたはずである。今後は各国のRISM組織を通して情報を本部に送るのではなく、各情報提供者がこの手引きを指針として、自ら情報を本部に送る方式に転換することである。IAMLメンバーから、その手引きを日本語に翻訳し、今後我が国からの情報提供が容易になるように、協力を申し出ていただいている。IAML会員は勿論のこと、非会員であっても、資料所有者にこの手引きの情報を共有していただけるようにしたいものである。

またシドニー会議に先立って、ワシントン大学のJudy Tsou女史より依頼のメールが来た。彼女は目下Music Archivesへのアクセス手段を容易にするためのプロジェクトの立ち上げに関わっておられる。音楽アーカイヴを所有するところは作曲家個人、楽器製作者、

合唱団、音楽学校、大学、劇場、宮廷、教会、出版者等々、実に多岐にわたる。また内容も楽譜、手紙、契約書、ポスター、音源記録、写真、報道記事、原簿など様々である。それらは研究者にとっては重要な資料であることも多い。しかしそれらの存在を知り、欲する資料に行き着くには、非常な困難がつきまとう。多くのアーカイヴがカタログ化されていず、検索することがままならないからである。このプロジェクトは世界中のアーカイヴ所有者に呼びかけ、カタログ作成に協力を呼びかけるものである。シドニーではそのやり方に関して、細部の詰めや修正がなされた模様である。すでに大英図書館、パリ国立図書館、ベルリンのプロイセン文化財図書館、デン・ハーグの博物館等、大型コレクションを所有するところからの、協力を取り付けているとのことである。順調に計画が進めば、R-プロジェクトに準ずるものとしたい、との意向である。小規模のアーカイヴへも参加の呼びかけが行われている。その動向は、http://www.iaml.info/en/activities/projects/access_to_music_archiveでご覧いただきたい。

国際会議において、我が国からの情報提供がほとんどなされず、目下国際社会への貢献の方法に関して模索している日本支部へ朗報をひとつ。リサーチ・ライブラリーのセッションにおける発表でのことである。18世紀、19世紀の印刷楽譜の中には、出版年代が記載されていないものがある。1974年にIAMLのガイド・ブックが出版され、それらの初期出版楽譜の年代を設定していくことが、楽譜編纂、書誌学、カタログ作成の面からも大切であるとの共通見解が得られている。今回はベートーヴェンの場合が例とされ、初版の異なるヴァージョンを年代順に並べることは可能かといった問題が論じられた。その際国立音楽大学で作成されたベートーヴェンの初期の出版譜のカタログが紹介された。世界的にみれば小規模なものであれ、このような地味なしかし確実な仕事が、より大きな脈絡の中で生かされていることを知ったのは、嬉しい限りであった。

過去4回の会議では、どちらかという自分の研究主題、そのために入手した情報を、現地の中で咀嚼し、その風土や生活の中で実

感をもって見つめる喜びを噛み締めてきた。しかし今回は、自分の関心外の文化圏への旅行であった。しかしそれだけに、広い大地において、いかにしたら様々な関心を持ち、音楽情報を待っている人々に速やかにサービスをすることができるのか、図書館員の前向きな努力が浮き彫りにされた回であったとも感じられた。これも私にとっては大きな収穫である。

さてシドニーのシンボルといえばオペラ・ハウスであろう。そのユニークな形、植物園の突端で河と海が深く流れあう入江に張り出すように建てられ、その素晴らしいロケーションからして、まさにこの街の名物にふさわしい。私は水曜日午後の遠足で、オペラ・ハウス見物を選択した。オペラのためのステージ、その倍はあろうシンフォニー・ホール、その他建物の内外に、演劇や小規模な催しもできるスペースがある。シドニー在住の友人と共に、オペラ・ハウスで夕暮れの海を見ながら食事をした後、ロッシーニの《セヴィリアの理髪師》を鑑賞した。昼間は大きく見えた劇場には、反応の良い聴衆の力も加わり、芝居小屋のような気さくな雰囲気が漂っていた。ここのオペラのスタッフは、メルボルン・オペラと掛け持ちである。つまりオペラがメルボルンに移動している間は、バレエ上演等がなされるそうである。特別ゲストが来ることもあるが、普通は地元の歌手、演奏家による上演のため、質にはばらつきがあるとのこと。その日の出来はまずまずのレベルとのこと。しかし私は毎日、地元の演奏家によりオペラが上演できるという状況を、うらやましいと感じずにはいられなかった。シンフォニー・ホールの雰囲気も知りたく、木曜日にマチネでマーラーの交響曲6番を聴いた。聴衆が入っていないと、大きさが目立ってしまうこのホールも、老若男女で充たされていた。評判のオペラ・ハウスへ入ってみようという旅行者が多いことは確かであろう。しかし土地の者にとって、オペラやコンサートに行くことは、大いなる楽しみであると受けとめた。これも友人から知らされたことであるが、弦楽器は勤勉なアジア系の音楽家、管楽器と声楽はヨーロッパ系の演奏家の音色の狙いに長があるとのこと。多民族、多文化国家を目指すオーストラリアから、この国らしい音楽が生まれてくる予感がする。

やはりわが目で見、耳で聞き、足で辿ることは素晴らしいことである、と総括できる今回の参加であった。

IAML2007 Sydney

藤堂雍子

オセアニアでの2回目のIAML、1999年ニュージーランド・ウェリントン会議前にも訪れたことがあるシドニーは今回も冬の季節。出発前まで連日雨で気温は13℃の予報だった。幸い会議期間中は、晴天に恵まれ日中20℃を超える日もあったとはいえ、朝夕はジャケットを重ね、海風の強い中、襟元にはマフラーという出で立ちで、毎日よく歩いた。

7月1日(日) 午後からのカウンスルでは、①先の選挙結果が公表された。会長は元会計のM.セヴェール(オランダ)、会長補佐はJ.バーク(スペイン)、J.P.カサロ(米)、A.ゲルゲレズ(エストニア)、J.ランブレヒト(独)が選ばれた。また空席となった会計にはK.アダムソン(英)が新たに推挙された。事務長はR.フリーリ(ニュージーランド)で変わらない。Ch.バンクス(英)が選挙途中に辞退表明、フランスからの2人の候補が選に漏れるなど想定外のこともあったが、バランスのとれた新役員チームがスタートした。②会議直前に、電子掲示板上で延々議論となった機関誌Fontesの電子化、選挙の合理的な手順と投票の電子化、会期頻度が毎年である必要があるかなど、いずれも財政がらみの運営上の問題提議がデンマークとスウェーデンの支部長から再度開陳されたが、Fontesは、印刷出版されるべき内容と形態の機関誌であり、他の電子ニューズレターやホームページとの機能の使い分けが課題であること、投票に至るまでの手続きは、国際機関として踏むべきフィードバックを経て相互理解を促す必要性も述べられ、単純性急な電子化を進め、財政節約したがために本旨を欠くことのないよう、反論が繰り返されるという慎重なやりとりがあった。また2009年度からの会費再値上げ(団体Euro59、個人Euro35.50)についての提案もあった。滞っていたFontesが大車輪で定期刊行のペースを回復した結果、強いユーロ下で出版費用が高騰しており、やむを得ない

事態かもしれない。一方で弱い通貨の下で喘いでいる国もあり、総会の決議を待つことになる。モスクワ音楽院の創設記念国際会議(Fontesはロシア特集号も予定)への会長出席、パリでの役員会などの報告もあった。

街の東部が小高い丘陵で、その北端は、海に向かって白い羽根を広げたオペラハウス、南にかけて音楽物学校、植物園、ハイパークなどの公園が連なっているのだが、夕刻から、その一角シェクスピア通りの脇にあるニュー・サウス・ウェールズ州国立図書館の旧館でオープニング・セレモニー。先住民アボリジニ声楽家のよくトレーニングされた伸びやかで音域の広い歌に感銘を受けた。荒川支部長、上法茂夫妻、井上公子、樋口隆一、茂手木潔子各氏と筆者が揃う(翌日伊藤真理氏も到着、火曜日から在日オーストラリア大使館勤務、音大図書館バイトの経験もある三田智子氏も加わった)。

西側はさして広くない地域に高層ビルが競い合うように建ち、見上げると目がくらみそうになる。海に囲まれたシティは、南北でせいぜい徒歩30分程度のビジネス・商業街である。オリンピック前年に周辺を掘り返していた音楽院は、見事に旧館脇や地下に新しい建物を備え、その中の二つのリサイタルホールとワークショップと呼ばれる階段式劇場が会議のメイン会場となった。

2日(月) シロアリが中を刳り貫いたユーカリの木で作られたディジェリドゥー(アボリジニ特有の木管楽器)の歓迎の音楽に導かれ



アボリジニがディジェリドゥーを奏して歓迎

てオープニング会場へ。シドニーに先住したアボリジニの一族キャディガル人奏者による地を這う倍音は優れて深く、打楽器のようなリズムや音色を醸し出していた。

会は、BartokとPercy Graingerの研究者でもあるMalcolm Gillies 教授による基調講演で始まった。欧米から見れば例年より遠隔地ということもあり、常連も少なく、セッションはその分アジアとオセアニアに焦点が絞られた。我々にとっては時差に悩まされることなく、東洋人やアボリジニも多い街中にはいつもの欧米での開催とは違った楽しみもあった。だが出席者には東洋の顔ぶれ(マレーシア、シンガポール、香港など)も見えたがそう多くはなかった。

午前後半は研究図書館部会で「中世・ルネサンスの手稿譜」についてシドニー大学、同大学中世研究所、ボストン・カレッジから主にスペインの典礼音楽について発表があった。特に「トレドの写本」の画像資料によるインヴェントリーとカタログについては、美しい細密画を含んだ写本を比較して調査できるよう電子化されている。美しいだけでなく筆跡を辿り、同一性の有無を容易に確認できる説得力のある調査報告であった¹。

午後の著作権委員会は現IMC会長であるオーストラリアの R. Letts により「文化の多様性と音楽生活における自由貿易協定(FTA)の影響」について、米国スタンフォード大学音楽図書館及び録音資料アーカイヴから「図書館による複製：米国著作権法108項の解説」がなされた²。多様社会での概論、そして戦略的メディア社会での図書館による例外措置による複製について、改訂に関する新たな取り組みが並列された。

この後の各国支部報告は支部長報告におまかせしよう。

夕方から同じ新館にある音楽院図書館見学をした。広いフロアーにCD、AV資料も含めた開架式書架と端末が並び、開放的かつ明るい空間を提供している。そのフロアーの地下に降りると高校生用の端末教室や、バックナンバー雑誌架の特別コーナー、セミナー室もあり、カリキュラムと一体化する工夫もある。カード式目録も健在だったのですべての資料のオンライン化には未だ至っていないということだろう。

3日(火) 「学術研究、折衷音楽、そして21世紀の知られざる出版」と題された書誌委員会とRILMの合同セッションでは、「自主制作のロックから世界中のポップまでのアクセス」について、また「学術研究と非アカデミックな印刷物」について、「抄録を作成するかしないか、RILMからの答え」と題された、今日広範囲な音楽分野で主題検索する方法の難しさについて問題が提議された。学術研究分野では意味ある抄録が、ポピュラー、あるいは非アカデミックな分野では必ずしも有効な検索手段とならない。総合データの一貫した検索手段を探る時代、しかも電子データを素材に、となると電子化されたデータの「索引化」が用いられるのが常套であるが、事務ベースで試用しながら、去年はアンケートなども行い、その方向をiBis(inter-net bibliographic indexing system)で探っている。

「マーケティングの経験：地球の片側からの見解」という凝ったタイトルを掲げたのは公共図書館部会で、まずシンガポールの演奏芸術のための公共図書館紹介。次の「日本の公共図書館での音楽情報サービス」(伊藤真理・松森隆一郎両氏の共同研究)は、豊富な統計資料を駆使し、愛知、東京、神奈川など都市型公共図書館での音楽情報サービスの実像を浮き彫りした発表で、IAMLでは初めての報告である。そしてリンカーン市立図書館の「古きネブラスカの音楽：電子化プロジェクト」の紹介が続いた。これは米国の一州都のレトロな音楽遺産を電子画像資料として蓄積したデータベースであった。

「RDA、DCMI、そしてMETS」というタイトルの目録委員会では、RDA(Resource Description and Access)は、2009年に出るAACR改訂版に反映される動きの解説、DCMI(Dublin Core Metadata Initiative)は、相互運用可能なオンラインメタデータ標準が、2003年にISO15836として国際標準となっているがその進捗報告、そしてMETS(Metadata Encoding and Transmission Standard)では、音楽資料に関連するポイントの解説とCDコレクションによるキャンベラの国立図書館の事例が紹介された。電子目録最新情報は日進月歩であり、ここでは敢えて詳述しない。

AV資料委員会とアーカイヴ・ドキュメンテーション部会では、「音の記録」というメイン・タイトルの下、アボリジニの「音資料の収集と未収コレクション」について国立図書館からデジタル化に至る過程を咀嚼する必要性が説かれた。さらにオーストラリア・アボリジニとトレス海峡(オーストラリア北東部とニューギニア南部間)太平洋信託統治諸島先住民研究所による「音楽と土地権：オーストラリア・アボリジニの先祖伝来の土地所有権利請求のドキュメントとしての記録」では、単なる土地の権利請求ではなく、それが失われた音楽文化を奪回することにつながる事が指摘され、先住民文化理解の深淵を覗くこととなった。

この日の夕方、ディジェリドゥーとピアノ、ディジェリドゥーと弦楽四重奏のアンサンブルを含んだオーストラリア現代音楽のコンサートが催された。この特有の木管を、ピッチ調整のため、演奏前にノコギリで切断することもあると実際にステージで披露した上での演奏、とりわけソロ及び、アボリジニの女声ソロとの協演は、すばらしい力と嘆きや祈りの込められた地に這う「音楽」であった。

4日(水) 「理解と挑戦の探求」と銘打たれたサービスとトレーニング委員会は、英国王立音楽院と王立音楽アカデミーの先輩格ライブラリアンが「オンライン上でどのように楽譜を見つけているか」を話し、オーストラリアの音楽資料を扱う若きライブラリアンたちが、シドニー工科大学・IFLA会長の司会で、各自の経験や直面する問題への挑戦、抱負をそれぞれ屈託なく情報交換し合った。

「良い企画でしたね」と、ドイツの音楽図書館員養成に長年携わっているセッション座長に声をかけると「彼らよく話してたねえ」と満足気であった。

教育機関図書館部会と公共図書館の合同セッション「デートしよう！あなたのパブリックとは？相互協力を期待して」。ブリュッセル王立音楽院から「音楽図書館の公共的側面、ヨーロッパの経験で、示唆と助言の喚起」は、ウィットに富んだ洗練されたプレゼンテーション。あの歴史ある音楽院が追いつかないほどの公共的サービスをしていることを初めて知った。オーストラリアの国立図書館が教育機関図書館などに対しリーダ

ーシップとサービスを提供しているのは当然として、米国流相互協力に至っているわけではないが、地域の音楽文化に深く貢献することにおいて閉鎖的ではないブリュッセルの音楽院図書館の例は興味深い。

午後は、ひと休みのつもりで開国の歴史案内を小耳にはさみながら、植物園経由、サーキュラーキー、ロックを巡り散歩するエクスカッションのコースを選んだ。ロックのブリッジに近いオーストラリア音楽情報センター(MIC)も訪ねた。オーケストラや音楽関連団体の寄り合う複合ビルの一角にあり、同業仲間同士の気さくで屈託のない歓迎を受けた。

夕方の短い時間ワインテイストパーティが音楽院で用意された。その足で近くのおペラハウスの公演に繰り出す人もあった。

5日(木) 「オーストラリア原住民に関する全体セッション」は、ノーザンテリトリー図書館、図書館と学識センターから「遠隔地の知的開発支援プログラム」、ノーザンテリトリーのシェファードソン・カレッジとシドニー大学から「先駆者の声：遠隔地先住民の文化復興とその音楽記録の役割」、国立図書館から「文化の修復と権利マネージメント：先住民と諸島民共同体のコレクション」等々についてそれぞれ述べられた。まさにアウトリーチの世界からの報告である³。

会議場の隣は植物園、よく育った大木のほこらでは見知らぬ小動物が眠っている。無数の蝙蝠がぶら下がり獣の臭いを放つ木々の下を恐る恐る通ったり、カラフルな鳥たちがじつとこちらを狙っていることに気づいて、食べかけのランチを持ったままベンチから逃げだしたりしながら、アメリカでもヨーロッパの古都でもないオセアニアを実感。

午後後半はカウンスルの2回目で関連団体との進捗報告が若干あり、今後の年次会議がナポリ(2008)、アムステルダム(2009)、モクスワ(2010)、ダブリン(アイルランド2011)、モンテリオール(2012)、オーフス(デンマーク2013)、ヴィーン(2014)、ニューヨーク(2015)で予定されていると発表された。

夕方から、ガムラン音楽と、シドニー音楽院教授の解説を含むアジアの旋律を意識した作品のコンサート。



植物園の巨木

6日(金) 目録委員会2回目、は、「新目録...新ルール...だがシステムは滞りなく稼働しているのだろうか?」と題され、「フランス国立図書館オンライン目録Opale plusへの変換と書誌印刷楽譜・自筆書簡の追加」について、この1年の進捗報告。

筆者は、昨年のヨーテボリ会議後、パリに滞在し、2時間近くに渡りBN音楽部門長からOpale-plusの説明を受けたのだが、OPAC担当者であるこの日の発表者から、操作方法の疑問を直に教わり、大変助かった。デジタル化遡及の計画が滞りなく進んでいることをこの報告で再確認。今回は完璧な英語でのプレゼンテーション。ミラノ国立図書館及び音楽研究財団から「イタリアの新目録規則」は、IAML現会長が「音楽はプリマドンナ」と目録法の累々転々を報告。

音楽教育機関図書館部会は、いささか苦しい紛れのタイトル「音楽院における文化交流と交差点」で、ライプツィヒ・メンデルスゾーン音楽院におけるオセアニアの留学生記録をまず紹介。「現代世界における日本伝統音楽の復興」と題し、伝統音楽の特徴を西洋音楽と比較し、実演も交え、日本の音楽教育の歴史のひずみにも切り込んで感銘を与えた新会員茂手木潔子氏⁴の後には、フランスの音楽院から、座長司会を兼ねて20世紀初頭のFl.シュミットやM.ドラージュ、ミヨーなど、フランス近代音楽に見られるオリエンタリズムの紹介があり、多様なセッションとなった。

総会とクロージングセッションでは、元会長であり、元 Fontes 編集として貢献された英国ブライアン・レッドファン氏逝去が伝え

られ、哀悼メッセージが述べられた。彼にはライブラリアンシップの著書もある⁵。

2009年度からの会費値上げについても可決された。また、RILMを構成するプロジェクトに新たに伝統音楽国際評議会(ICTM)が加わったことをお伝えしておこう。

夕刻からシティ西の湾沿いにあるダーリング埠頭のレストランでフェアウェル・ディナー。来年もまた海の側、真夏のナポリで年次会議が開催される。

注1 発表者 Graeme Skinner は、オーストラリアの音楽学者。現代オーストラリア作曲家 Peter Sculthorpe の研究者でもある。詳細は、以下を参照。

<http://www.users.bigpond.com/graeme.skinner/index.htm>

注2 デジタル社会での著作権保持者と利用側のバランスを見直すLCの研究グループは、その成果を<http://www.loc.gov/section108/>でも報告している。

注3 アウトリーチについて日本からの小報告は、Fontesあるいは電子ニューズレター近刊掲載を参照されたい。

注4 準備段階から、多事多難を何とか切り抜け、正攻法による密度の濃い発表でセッションに漕ぎ着けて下さった茂手木潔子氏にこの場を借りて敬意を表し、厚く御礼申し上げます。

注5 Redfern, Brian. *Organising Music in Libraries*. Rev. and rewritten ed. London: C. Bingley, 1978-79.



フェアウェルでの荒川恒子支部長と樋口隆一RILM支部委員長

国際音楽資料情報協会 (IAML) シドニー会議報告

茂手木潔子

The Survival of Traditional Japanese Music in Our Contemporary World

Kiyoko Motegi

[Introduction]

In this session, I will introduce some of the essential features of traditional Japanese music and discuss attempts that have been made to ensure that music's continued existence in our contemporary world.

We've heard a *didgeridoo* played at this conference. I felt that the richness of the harmonic structure of this instrument's sound has something in common with the characteristics of Japanese music.

Before getting into the main subject of this presentation, please permit me to outline the current state of music education in Japan. The music taught in schools is almost entirely European classical music, or music by Japanese composers that incorporates Western functional harmony. Conditions for becoming a music teacher in elementary and middle schools include the ability to read a five-line staff, play the piano, and conduct choruses and wind ensembles.

Until recently, teachers were not required to have any knowledge of Japanese music or be able to play any Japanese instruments. Especially, in Japanese National University of Education, very few professors can provide instruction in traditional Japanese music performance practice. Full-time professors in performance practice are virtually all Western classical music performers. Very few Japanese music college graduates have ever touched a traditional Japanese instrument or possess any concrete knowledge of Japanese music. Despite this, we know that on the rare occasion when a teacher in elementary or middle school does understand Japanese music and incorporates it in the curriculum, nearly all

of the students show a strong interest. This leads us to the conclusion that young people fail to show an interest in Japanese music because teachers are unable to teach it.

(Well, now I will come to my topics.)

(茂手木の挿入文)

Previous researchers have pointed out that one of the basic features of Japanese music is an intense interest in timbral variety.

I've taken this idea one step further by linking this interest in timbral variety with a general cultural preference I call *meimei*, which roughly translates as, "to each his own." Today I'd like to examine Japanese music from the perspective of *meimei*, and introduce some modern pieces that embody this concept. Because our time is limited, I will keep my presentation brief. If you would like a fuller explanation of any of the points I make, please feel free to ask during the question and answer period.

2. Video: Opening Section of a *Bugaku-Hoe* Performance at the National Theatre
(国立劇場主催【舞楽法会】DVD 07.9.16 7分ぐらい)

The music you just heard was performed at the National Theatre in Tokyo in September 2006. It's the first part of a Buddhist ritual performance called *bugaku-hoe*, which incorporates the traditional genres of *gagaku* (court music) and Buddhist chant. The sounds of various percussion instruments mix with the voices of chanting priests to create a rich harmony of timbres. But as you can tell, the "harmony" I refer to is very different from the harmony of classical Western music.

In this example, the chants from three different Buddhist sects are sung together. Even when all the priests are in the same sect, they sing the single melody in slightly different ways, raising and lowering the pitch at slightly different times to create, if not tone clusters, at least a heterophonic texture. Actually, priests from three different Buddhist sects had never chanted

together before the 1980s, when Toshiro Kido, the National Theatre director in charge of *gagaku* and Buddhist chant, decided to experiment. Mr. Kido believed that the true nature of Japanese music lay in the combined swell of disparate sounds. The percussion performance shown at the beginning is a newly composed piece by the Japanese composer Yoshihiro Kanno. In creating this work, Mr. Kanno made use of various percussion instruments in my collection and focused on sounds that underscore the *meimei* concept.

The percussion instruments used in pre-modern Japan were all handmade. Each has its own distinctive timbre and pitch. They can't be tuned to create a uniform ensemble sound. But because they all have a unique and complex harmonic structure, they create a pleasing, massive timbre when played together, so that virtually no pitch seems out of place. The result is the sound you heard in the first percussion piece.

(Let's look at another exmple)
(DVDは、'93.3日本武道館での
「千僧曼荼羅」)

This is an example of Buddhist chant sung by about a thousand priests who all belong to the same sect. This event was part of a religious ceremony, but it was also presented experimentally as a musical performance. Even though all of the priests are singing the same melody, each sings it slightly differently in his own unique voice, creating a magnificent band of sound.

3. Key Word: *Meimei*

Now let's take a closer look at that all-important concept, *meimei*, which as I've said can be translated, "to each his own." The word *meimei* is widely familiar to us Japanese and has long been used in our culture. Industrial designer Akioka Yoshio has spent his distinguished career introducing people to the wonderful culture of Japanese traditional tools. Here's what he has to say on the subject of chopsticks: Wakasa is the most famous spot in Japan for

lacquered chopsticks, and one of the artisans there told me this: "Listen, professor, we have to make many hundreds of kinds of chopsticks to make it in this business. Every Japanese feels like he has to have a pair that's different from everyone else's."

Akioka identifies *meimei* as the key term that characterizes Japanese culture. He notes that Japanese family members typically have their own rice bowls and chopsticks, which are different in size and pattern from the others, and notes that this contrasts sharply with the uniformity that typifies Western dinnerware.

It's said that the word *meimei* (which literally means "each person individually") is derived from the word *menmen* ("each face"), implying that, just as everyone has their own unique face, they have their own unique likes and dislikes, and their own methods of expression. In this context the use of plates, cups, and even spoons and forks of varying sizes and shapes in daily life seems completely natural and proper. But in recent years, this natural preference for diversity has increasingly been viewed as a deficiency in our traditional music, and indeed, downright inconvenient.

Traditional Japanese music has always placed priority on the unique vocal timbre and range of each individual performer, which are prized for their constant variation. In this spirit, Japanese musicians never developed a fixed and standardized notational system for their art. Through the centuries, individualized art forms arose with their own styles and techniques, and new genres were developed.

Compared with classical Western music, which entered Japan in the late 19th century, the native music that developed within the Japanese cultural milieu seemed to have no clear "result" and struck listeners who had adopted Western values as "immature" and "un-modern."

These sentiments were crystallized in the comments of the American natural historian Edward Morse, who, in his book *Japan Day by Day*, noted:

"From a foreigner's standpoint the nation seems to be devoid of what we call an ear for music. Their music seems to be of the rudest kind.

Certainly there is an absence of harmony."

During staying in Japan, in *Day by Day*, Morse recognized the uniqueness of Japanese music and noted many valuable observations concerning Japanese musical culture. Over the next three years, I plan to visit Boston to conduct research on the Morse Collection in Boston.

In the piece *Enbu*, which serves as a prelude in *gagaku* performances, the instruments play a kind of canon, with each instrument playing in free rhythm. The "to each his own" approach is especially evident here.

Listeners who are used to the precisely matched tones and rhythms of Western music have a hard time appreciating the expressiveness of this piece, and apparently often conclude that it's merely sloppy playing.

(Here's a video of an *Enbu* performance)

DVD: 「振銚」三節の登場部分のみ

(国立公演より) 1.2分

4. Horse Bells: Another Example of *Meimei* (持参した鈴を見せながら)

I have a set of bells (the kind that often appear in the *ukiyo-e*, wood cut print, of Katsushika Hokusai) and some old horse bells that have the same shape as the first set. The small, forged-metal bells are in a cluster of about ten, each with a different pitch. Also cast-metal bells used in Kabuki music, are made in different sizes and have different pitches. I also own cast-metal bells made in Germany, but in their case each bell in the cluster has the same timbre and pitch. This fact seems to support the contention that the concept of "to each his own" is firmly embedded in Japan's aural culture.

Of course, it's possible to argue that the idea of combining disparate elements into a single whole applies just as well to Western orchestras that combine different types of wind and string instruments. But in the case of so-called classical music, instruments of the same type (like the flute section) make no attempt to play slightly out of tune with each other, nor do professional choruses allow hoarse-voiced baritones in their midst.

The whole premise of creating an ensemble and mixing different elements in Western ensembles is very different from that of *shomyo*, *gagaku*, and other traditional Japanese ensembles. In the end, it's a matter of taste: in music, the Japanese have historically favored disparity, in contrast to the Western preference for uniformity.

Perhaps because of Japan's adoption of Western values, however, traditional Japanese instruments designed to produce individualized tones and pitches (even when multiple instruments of the same type are played together) lost their status as musical instruments after the Meiji Restoration, the end of 19 century. Similarly, singing methods that valued individual voices were considered primitive and "pre-harmony," and were somehow no longer thought of as a means of musical expression. This state of affairs lasted roughly until the 1980s, when certain types of modern music appeared and the fields of cultural anthropology and ethnomusicology became more generally recognized. Unfortunately, however, the Western standard of "do-re-mi" music is still given precedence in Japanese school education even now in the 21st century. Traditional Japanese music is increasingly being left in the hands of performers who have been educated on the basis of modern (Western) values. As a result, their music is becoming the norm, with less and less priority given to the charms of subtle differences in timing and tone. This is a very

serious problem.

I personally believe that the true appeal of Japanese music resides precisely in the variation in pitch and timbre that makes it unique. This is why I feel so strongly that the current trend must somehow be reversed, and I have devoted a great deal of time and thought to the issue. My way of thinking has been given concrete form by a young talented English composer named Phillip Neil Martin. Mr. Martin has also come to feel that the concept of *meimei* is the defining characteristic of Japanese music. For him as for me, the crowning achievement of Japanese music is the combination of different resonances typified by *meimei*. For my final selection, I would like to play for you part of a composition by Mr. Martin that was premiered in London last year.

(P.N.Martin作曲「Japonica」の作品をCDで紹介)

Of course, it's also true that the "to each his own" approach that typifies Japan's traditional auditory culture can lead to a loud and chaotic sound environment, which is probably why the streets and other public places in Japanese cities are so often filled to overflowing with annoying, unnecessary noise. Foreign visitors to Japan have no doubt experienced this, as was portrayed in Sophia Coppola's movie, *Lost in Translation*.

I believe that the next step in the new development of Japanese music lies in honoring the beauty of individual voices while imposing some kind of unity upon them.

(最後に、持参した楽器(篠笛、ケイス、小木魚、江戸時代の馬鈴、歌舞伎の鈴)で自己流に演奏して、日本の音色を少し紹介)

Thank you for your kind attention.

日本の公共図書館での音楽情報サービス

愛知淑徳大学文学部 伊藤真理
愛知県図書館 松森隆一郎

1. はじめに

本稿は、IAMLシドニー会議 Public Libraries Branch公共図書館部会の第1セッション(2007年7月3日)で発表した”Music Information Services at Public Libraries in Japan”の内容¹である。

一般の音楽ニーズを持つ人たちを対象とした場合、情報収集の拠り所となるべき候補のひとつとして、公共図書館が含まれるであろう。しかし、音楽分野での日本の公共図書館サービスについての研究は、これまでほとんど行われていない。そこで、本研究では、公共図書館を中心として、提供されている資料の種類や提供方法について事例を紹介しながら、図書館ではどのようなサービスが行われているかについて概観した。これをもとに、今後当該分野で必要とされるサービスや、サービス提供する側が習得すべき技能や知識を検討することが可能である。

発表は次の5項目、(1)だれが音楽情報を求めているか、(2)音楽情報はどこで得られるのか、(3)一般利用者の音楽情報へのニーズとは何か、(4)公共図書館でのサービスはどのようなものか、(5)今後の検討課題、から成る。

2. 音楽人口

日本の音楽愛好家が少なくないことは想像に難くない。たとえば、ピアノを習う子ども達は今でも多いし、合唱活動も盛んである。昨年イタリアの国際コンクールで日本の合唱団が優勝したことは私たちの記憶に新しい。本稿では、習い事に関する調査から音楽人口を推測してみたい。

文部科学省(MEXT)は、「平成16年度「子どもの学習費調査」(図7-1)²で習い事にかかる費用を調査している(図1参照)。習い事にかかる費用は年々増加しており、特に小学生の間で一番活動が盛んである。もっとも人気のある習い事は水泳で、小学校低学年で多いが、学年があがるにつれて塾に通う子供が増えていることがわかる。それに比べ、芸術文化活動は低年齢層から高年齢層にわたって常に一定程度の割合で行われている。

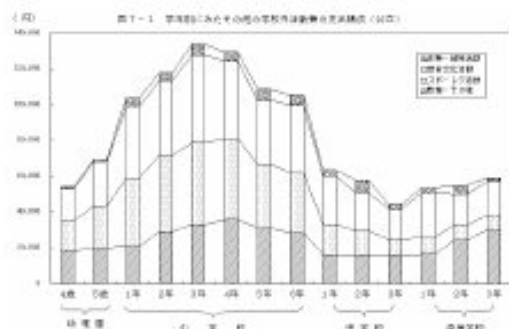


図1. 習い事にかかる費用

子どもの生活・学習の実態に関するアンケート調査³ (Benesse教育研究開発センター2002)では、回答者の34%が5つ以上の習い事を経験していることがわかった。この調査でもっとも多いのは水泳と通信教育だった。楽器のレッスンを受けるのは3番目に人気がある。何らかの楽器の個人レッスンを受ける、音楽やオイリュトミーのグループレッスンを受ける、あるいはダンス教室に通うといった習い事をしているのは、59.9%だった(図2網掛け部分)。このように音楽に関連する習い事は、子ども達にとっても人気のある活動であることがわかる。

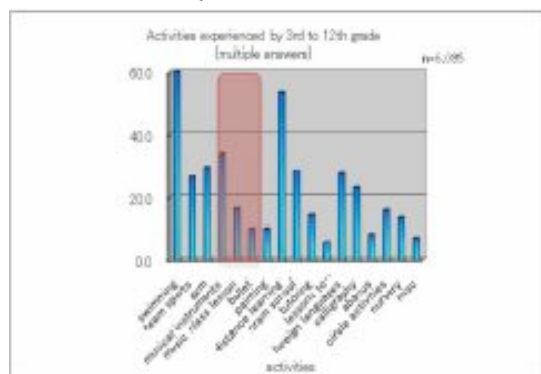


図2. 小学3年生から高校3年生までの習い事

さらに、PTNA(全日本ピアノ指導者協会)による統計⁴を見てみよう。PTNAは現在11,000人の会員を有するピアノ教育指導を支援するための団体で、日本政府の後援を得、アメリカやヨーロッパの団体と協定し、活動している。図3は、PTNAが開催している国内のピアノコンクール参加者の1997年から2005年までの推移であるが、9年間に参加者数は約3倍になっている。

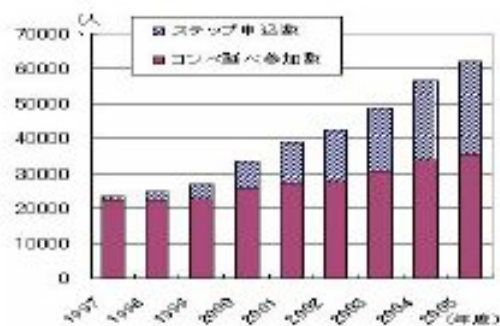


図3. PTNAコンクール参加者の推移

大人の余暇の過ごし方についてはどうか。外国語やパソコン教室、資格取得のための時間とともに、音楽やダンス教室に通う大人も少なからずいる⁵。音楽に関する習い事は、すでに経験したことのある人についての統計(棒グラフの右側)と同様に今でも継続して習っている人(折れ線グラフ)の差が少なく、継続的に行われていることがわかる(図4参照)。

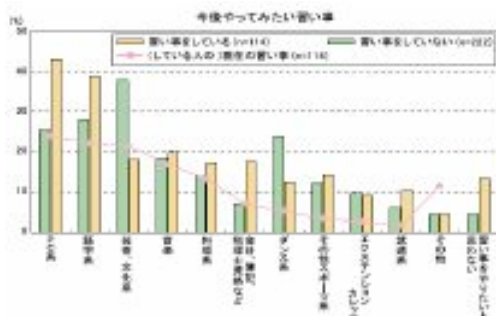


図4. 大人の習い事について

このように音楽愛好家、音楽活動を行っているアマチュアの人たちが恒常的に少なからず存在することが統計からも明確である。こうした人々の音楽芸術活動で必要となる情報や資料をどのようにして提供しているのかは、文化活動の社会的支援の観点から重要である。

3. アクセス可能な音楽情報

では、一般の人々はどこで音楽情報を入手可能なのだろうか。今日、大学図書館でも、地域社会への貢献から一般利用者に図書館を開放する動きが広がりつつある。しかしながら、専門図書館である音楽大学附属図書館などでは、音楽資料の特性や複雑な著作権

についての利用者ととの摩擦を避けるため、実

質的な開放を実施する前に検討すべき課題が多い。やはり、社会的機能からも、公共図書館がその役割を担うことが求められる。

ここで日本の公共図書館での音楽資料に対する取り扱いについて説明しておかねばならない。一般に、楽譜は図書と同様に扱われている。多くの公共図書館で図書と楽譜が混排されているのを目にするのである。日本図書館協会が毎年行っている図書館調査でも、楽譜の統計は取られておらず、図書に含まれている。したがって、個々の図書館が独自に統計資料を提供しているのでなければ、全体の数値を把握することはできない。ここでは、著者らが見つけた統計を紹介する。神奈川県立図書館は3,145冊⁶、愛知県文化情報センターアートライブラリーは15,200冊⁷、民音音楽博物館45,000冊⁸の楽譜を所蔵する。これら3図書館については後述するので、ここでは数値のみにとどめる。東京文化会館音楽資料室⁹は32,954冊の楽譜を所蔵している。東京文化会館は、優れたコンサートホールを有し、音楽活動の拠点となっている。当ホールでの演奏会プログラムなど貴重な資料を多く所蔵している。資料室資料は、レンタルパート譜800冊以外は貸出対象ではない。また東京在住者のみを対象としており、資料の利用は制限がある。全日本合唱センター資料室¹⁰は、16歳以上を利用者の対象としており、25,000冊の合唱音楽関連の楽譜を所蔵している。アマチュア合唱グループから寄贈される録音テープやプログラムを収集するなどユニークな活動を行っている。民音音楽博物館と同様に、公共団体による運営施設ではないが、その機能は公共機関と同等の役割を果たしている。

録音映像資料(以下、AV資料)は、今や公共図書館での主要なコレクションのひとつである。約90%の公共図書館でAV資料を所蔵しており、新たに設置される図書館ではほとんど100%に近い。図5は愛知県立図書館のCDの所蔵と貸出利用数の10年間の推移である¹¹。2005年現在、約15,000タイトル所蔵しているが、2002年にCDの館外貸出を開始したところ、貸出数は3倍になった。AV資料の人気を示唆する統計である。

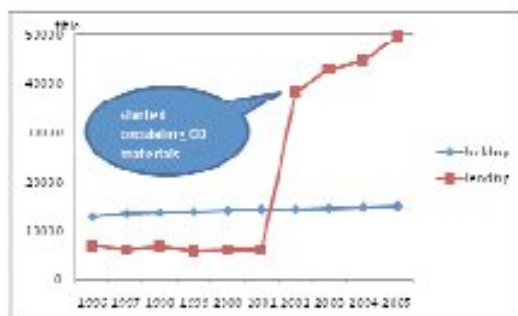


図5. 愛知県立図書館のCD所蔵と貸出数の推移

トッカータ(トッカータ)は、日本国内の約10%の公共図書館に対し、AV資料の発注、装備や書誌データ作成を行っている。トッカータによれば¹²、日本の公共図書館でのAV資料の約半数がポピュラー音楽である(図6参照)。器楽音楽、オペラや声楽などを含むクラシック音楽は約26%となっている。また公共図書館での選書方針は、主要な作曲者、演奏者による資料、各種の受賞作品、地域の音楽や長期的視野で収集の価値があると認められたもの、というのが主な点である。しかしながら、実際の運用では、利用回数が減ると次年度の予算に直接影響があることから、ポピュラーなもの、その折々に注目された資料を収集する傾向が見られ、またMEXTの学習指導要領などの改訂の影響も大きいようである。

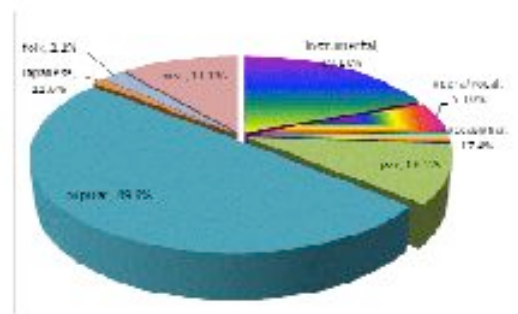


図6. 公共図書館のCDのジャンル別割合

音楽提供を取り巻く環境は急激に変化している。iTunesやその他のウェブサイトから楽曲をダウンロードすることは、もはや私たちにとって日常的なことになっている。楽曲購入の動向は、もちろん関連はするのだが、図書館サービスと少しずれるため、ここではA V レンタルにのみ着目したい。レンタル

ショップは日本での音楽情報提供で見逃すことができない。日本レコード協会(RIAJ)¹³による調査では、国内のレンタルショップは1989年以降、店舗数が減少傾向にあり、2006年現在3,100店である。しかし、1店舗あたりの規模は拡大しており、平均して12,000タイトルのCDを在庫している。全体では3千6百万タイトルで、公共図書館全体の所蔵数4千万タイトルとよい比較となろう。年間の日本のCDの売り上げ数は2億5千万タイトルなので、約14%をレンタルショップが在庫していることになる。ちなみに、レンタルショップでは、1アルバム300円でレンタルできるのに対し、iTunesでは1曲150円であり、レンタルショップの需要が根強い要因になっていると思われる。

4. 一般利用者の音楽ニーズ

国立音楽大学付属図書館は、1989年に、全国の音楽利用者に対しアンケート調査を行った¹⁴。一般利用者に対する図書館サービスの需要を明らかにし、利用者の視点から図書館サービスの再検討を試みるためである。対象者は、全国の音楽研究者、音楽教育者、音楽ビジネス関係者、プロの演奏家、アマチュア演奏家など多様であった。18年前の調査であるため、データをそのまま現在に適用することはできないが、利用者のニーズを把握するデータとして有用である。本調査結果から、回答者は西洋音楽、音楽教育、民族音楽、日本音楽などのジャンルの情報を主に求める傾向にあることがわかった。本調査でのポピュラー音楽に対する需要はかなり低い。また、図書、雑誌と同様に、楽譜やAV資料に対する需要が高かった。複数回答方式により、これらの回答者がどこで音楽に関する情報や資料を得るのかについてたずねたところ、一番多かったのは楽器店であった。残念ながら図書館は5番目に順位づけられており、これらの回答者は図書館サービスの恩恵を十分に受けていないことがわかった。裏返せば、音楽図書館は、一般利用者に対し広くサービスを提供しているとはいえないことが明らかとなったのである。

音楽需要をさらに確認するために、国立国会図書館によるレファレンス協同データベース¹⁵を用いて、どのような音楽に関するレファレンス質問があったかを分析した。レファレンス協同データベースは、参加館で受

けたレファレンス質問を共通のデータベースに蓄積し、同様のレファレンス質問の解決や、事例研究などへのデータ提供のために構築運用されている。現在、約25,000件のレファレンス質問が蓄積されている。

分析では一般公開されているレファレンス質問のうち、公共図書館で受けた音楽関連の質問を対象とした。このデータから音楽ニーズの全体像を把握できるわけではないが、その一端を知ることが可能であろう。質問の約45%が、地域の音楽、民族音楽や童謡・唱歌に関するものだった(図7参照)。ポピュラー音楽についての質問は全体の約1/5だった。レファレンス質問のテーマについては、約1/3の利用者は歌詞についての情報を求めている。また楽曲自体(楽譜が見たい)を探している利用者も多かった(図8参照)。レファレンス協同データベースでは、図書館員による回答プロセスが記録されているため、どのようなツールを用いて問題解決をしたかを把握することができる。図9は利用したツールが有用だった件数(図の赤色)と情報を得られなかった件数を、ツールの種類ごとに示した。蔵書目録や参考書だけでは、有用な情報を得られないようであることを指摘しておきたい。またCDのライナーノーツは、歌詞、楽曲の歴史的背景や演奏者の情報などさまざまな情報を得る有用なツールとして用いられている。

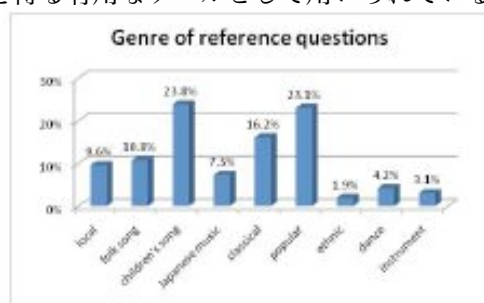


図7 ジャンル別レファレンス質問

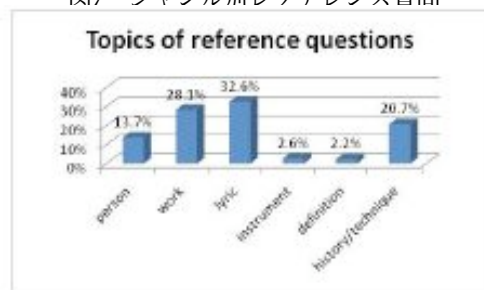


図8. トピック別レファレンス質問

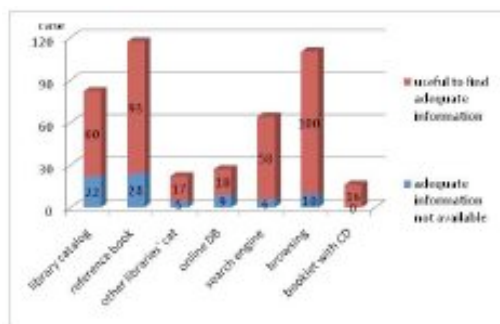


図9. 回答に用いたツール別レファレンス質問件数

5. 公共図書館でのサービス

先に述べたように、日本の公共図書館では、AV資料への認識は高まっているが、音楽資料や情報を対象とした積極的なサービスはまだ少ない。ここでは、神奈川県立図書館、民音音楽博物館、愛知県文化情報センターアートライブラリーの活動を紹介したい。

神奈川県立図書館は、人文学・芸術学分野の研究図書館の機能を果たしている。科学技術分野については、県立川崎図書館がその責務を担っている。神奈川県立図書館は視聴覚資料室を備えており、ビデオテープなど映像資料約12,000点、レコード、CD、カセットテープなどの録音資料約47,000点、楽譜3,145冊などを個人、団体に貸し出している。AV資料の貸出は、利用者にとって歓迎されていることが、年間貸出数65,213点という数値からも明らかであろう。近隣の横浜市立図書館ではAV資料の貸出を行っていないことから有用なサービスである。また、市立図書館での資料の中心はポピュラー音楽である。県立図書館の蔵書構築方針の検討では、他図書館の資料収集方針との区別、CDレンタルショップとの役割の差への認識を高め、クラシック音楽とジャズ音楽を中心としたコレクション形成を行っている。幸いなことに、県立図書館へ毎年200タイトルもの寄贈を行う利用者や、個人のワーグナーコレクションを継続的に寄贈する利用者があり、当該分野の主要な雑誌で取り上げられているCDを網羅的に収集可能な状況となっている。

民音音楽博物館は、財団法人民主音楽協会により1974年に設立された音楽専門図書館である。クラシック音楽を中心としており、AV資料120,000点、楽譜45,000冊、図書

30,500冊、民族楽器615点、ピアノロール1,200巻所蔵している。当博物館は在勤・在住を問わずだれでもが利用できる点で特徴的である。また、AV資料をのぞき、原則貸出可能となっている。オーケストラ・バンド用パート譜の貸出は全国からニーズがあり、小・中・高等学校での音楽教育やクラブ活動で、レパトリの支援に大きく貢献している。もうひとつの当館の特徴は、日本で出版されたクラシック音楽関連図書の網羅的収集である。こうしたユニークなサービスに加え、民族楽器の収集と展示、学芸員研修などの社会的活動を行っている。

愛知県文化情報センターアートライブラリーは1992年に創設され、美術館、芸術劇場、文化情報センターで構成される複合施設の中にある図書館である。愛知県はトヨタ自動車の本社があり、文化活動も盛んな地域である。その芸術文化活動の拠点となるのが愛知芸術文化センターである。美術館、芸術劇場、文化情報センターは高度な施設機能を活かして相互に連携を図り、県民が楽しく身近に芸術文化に触れられるよう芸術文化活動を展開している。県民への芸術資料の提供、美術館や劇場で行われる企画展、企画事業のサポート、中部地区の芸術資料センターという役割を担って作られたのがアートライブラリーである。

アートライブラリーは、国内外の美術、音楽、演劇に関する図書や展覧会カタログ84,000冊、楽譜15,200冊、雑誌などの文献資料のほか、クラシック音楽を中心としたCD、レコードなどの録音資料、ビデオテープ、DVDなどの録画資料約26,400点を所蔵している。これらの資料を広く公開し、AV資料などの一部をのぞき貸出を行っている。音楽専門の公共図書館、美術専門の公共図書館は日本にもいくつかあるが、美術、音楽、演劇、舞踊といった芸術全般を扱い、しかも一部資料は貸出を行うという図書館は日本で唯一アートライブラリーだけである。

利用者は常連客が多く、地域の芸術愛好家や美術、音楽大学の学生、卒業生が主な利用者だが、他の美術館の学芸員の利用、文化センター内の美術館や劇場での催し物を見に来た人や催し物の出演者、スタッフなどもよく利用する。音楽関係では公共図書館にはほとんど所蔵が無いクラシック音楽の楽譜、CD

の利用が多い。公共図書館とはいえ、芸術専門の図書館ゆえに所蔵資料の内容は専門的資料が多くなり、そのため「敷居が高い」と思われ、県民への認知度も高くないのが現状である。しかし、このような形態の図書館は他にないため、特に他県からの利用者には重宝がられ、また、地方に出て行って初めてアートライブラリーの存在の重要性を認識したとを感じる利用者もある。

アートライブラリーでは、利用者の検索を保証し、適切な情報の提供を行うよう努めている。そのために、典拠レコードの検索を介した蔵書目録検索システムの提供を行っている。音楽作品は外国語によるものも多く、それらを検索する際、私たち日本人は原語で検索するよりもカタカナや漢字仮名混じりでキーワードを打ち込んで検索するが多い。より適切な検索結果を導くためには、標目に対する正確な典拠レコードの作成と、書誌レコード中の各標目が典拠レコードとリンクされていることが必要となる。音楽作品検索は、このように書誌作成上でも複雑であるが、検索の観点でもわかりにくいいため、利用そのものの敷居が高いといわれる原因のひとつになっているのかもしれない。音楽の検索と比べ、美術や建築では複雑な検索を必要としないようである。

アートライブラリーの蔵書検索システムでは、統一標題をキーとして、参照タイトルをリンクさせていき、それを作曲家典拠と組み合わせることで検索に対応できるようにしている。段階を踏んで検索できるように工夫しているが、そのことが検索手法を複雑なものにし、利用者が難しいと感じてしまう原因になっているのかもしれない。いかにわかりやすく、使いやすくするかがアートライブラリーに課せられた使命であると考えられる。

図10から15は、オーストラリアの作曲家グレンジャーを例に、所蔵資料の詳細検索を行ったものである。作曲者や演奏者など個人名・団体名について、まず典拠形を選択し(図10、11参照)、目録検索を行う(図12参照)。図13はその検索結果表示である。また同じ手順で、出版者の典拠形検索も行うことができる(図14、15参照)。もちろん、画面には利用者に難解な「典拠」ということばは出てこない。

図10. カナあるいは原綴りで検索

No.	選択	人名・団体名	国名	職業	録音	録音	備考
1	☒	Grainger, Percy A. (Percy Aldridge)					
2	☐	Grainger, Percy A. (Percy Aldridge)					
3	☐	Grainger, Percy A. (Percy Aldridge)					
4	☐	Grainger, Percy A. (Percy Aldridge)					

図11. 該当する人名を選択

図12. 「Grainger」の典拠形「グレンジャー パーシー」が確定されて検索を行う

著者	書名	年次	出版社	価格	発行部数	在庫
16	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
17	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
18	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
19	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
20	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
21	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
22	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
23	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
24	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
25	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
26	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
27	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
28	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
29	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
30	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
31	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
32	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
33	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
34	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
35	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
36	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
37	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
38	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
39	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
40	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
41	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
42	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
43	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
44	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
45	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
46	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
47	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
48	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
49	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
50	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
51	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
52	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
53	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
54	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
55	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
56	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
57	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
58	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
59	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
60	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
61	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
62	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
63	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
64	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
65	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
66	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
67	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
68	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
69	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994
70	著者不明	1994	1994	1994	1994	1994

図13. 検索結果一覧表示画面


アトリンクフリー-無償版検索

詳細検索

この条件で27件の結果を-無料-で公開し
 (検索-を停止-後に実行可能)

資料番号 ☐ 題名 ☐ 著者 ☐ 編者 ☐ 雑誌

のため 次の全てを選択

人名・団体名 で検索する

試験 簿

検索条件

言語名 を含む

Indochina

著(者)

請求分類

資料 番号 検索

図14. 人名「Takemitsu」と
出版者名「Salabert」の掛け
合わせ検索

最新映画 (10月17日)		最新DVD (10月17日)		最新ブルーレイ (10月17日)	
品名	原題/原案	品名	原題/原案	品名	原題/原案
1	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破
2	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破
3	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破
4	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破
5	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破
6	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破
7	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破
8	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破
9	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破
10	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破	新世紀福音战士 劇場版 破

図15 図14の検索結果一覧表示画面

利用者への丁寧なサービスを提供するために、もうひとつ考えなければならないのが、

適切な人員の確保の問題である。現在、正職員5名、嘱託職員1名、アルバイト2名、委託職員1ポストで運営しているが、正職員は定期的に異動があるため、専門職としてのスキルを養成することが困難な状況となっている。また、必ずしも美術、音楽に強い職員が配属されるわけではない。アートライブラリーの特徴として、音楽のみならず美術、演劇、建築などの分野にまたがったサービスを行う点があげられる。オペラ上演のために使う衣装について調べに来た利用者に対し、中世の美術書や民俗関連の資料を提供することもある。また、竹久夢二が表紙を描いているセノオ楽譜の一覧と実際の楽譜を見たいと探しに来る利用者もいる。職員の専門性をいかに高めていくか、図書館全般の課題でもある。

6 検討すべき課題

本研究での利用者ニーズや図書館の現状に関する分析から、これから私たちが取り組むべき課題をまとめる。まず、現在の公共図書館の選書方針の再検討についてである。公共図書館で受け付けられたレファレンス質問では、民謡や童謡、唱歌などの歌詞について情報を求める場合が多く、クラシック音楽に関する質問は多いとはいえなかった。しかしながら、国立音楽大学附属図書館の調査では、クラシック音楽などに関する情報ニーズが多いことがわかった。また、私たちの周りにはクラシック音楽を学ぶ人々も少なからず存在することも明らかとなった。短期的なニーズへの対応から、長期的な蔵書構築の見直しを図ることによって、このような潜在的な利用者のニーズに対応できる蔵書構築を行うことも可能ではないだろうか。

2つ目に、本発表において公共の専門図書館についてニーズが高いことを紹介した。特に楽譜の利用を希望する利用者は、このような限られた数の図書館を頼りにするしか手段がなく、利用に限界がある。このことは、地域の身近な図書館がレベルアップできる可能性を持っていることを示唆している。利用者が求めている情報は、必ずしも高度な専門的な情報とは限らないが、ポピュラー音楽を中心としたCDなどだけでなく、その地域の利用者層に見合った資料やサービスの提供を検討する可能性がある。

公共図書館は、より広く一般利用者に音楽情報のサービスを提供することを可能にする点で、社会的に重要な役割を担っている。音楽情報サービスを展開していくためには、国内外の様々な取り組みを把握する必要がある。日本の現状を報告することは、今後の国際的な情報交換の端緒となると期待している。

注1 発表のパワーポイント資料は、IAML Public Libraries Branchウェブサイトで見覧可能である。http://www.iaml.info/organization/branches/public_libraries

注2 文部科学省「平成16年度「子どもの学習費調査」2004年」http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/006/05120501/003.htm (last access 7/31/2007)

注3 ベネッセ教育研究開発センター「第2回子育て生活基本調査報告書」2002年、p. 69. <http://www.crn.or.jp/LIBRARY/KOSODATE/KOSODATE3/HOUKOKU.HTM> (last access 7/31/2007)

注4 ピティナ「協会概要－協会データ」2006年。<http://www.piano.or.jp/info/data/index.html> (last access 7/31/2007)

注5 きかせてネット「「習い事」に関するアンケート」2002年。
http://www.kikasete.net/monitor/trend_watc (last access 7/31/2007)

注6 神奈川県立図書館「所蔵統計」
http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/riyou/17knrt_syozoutoukei.htm (last access 8/1/2007)

注7 愛知県文化情報センターアートライブラリー「利用案内」<http://www.aac.pref.aichi.jp/frame.html?bunjyo/alib/main.html> (last access 7/31/2007)

注8 民音音楽博物館「所蔵資料」
<http://museum.minon.or.jp/material.html> (last access 7/31/2007)

注9 東京文化会館音楽資料室「音楽資料室のご案内－所蔵資料」
<http://t-bunka.jp/shiryoku/shozou.html> (last access 7/31/2007)

注10 全日本合唱センター資料室「概要」
<http://www.jcanet.or.jp/center/index.html> (last access 7/31/2007)

注11 下記の資料に基づき、筆者が図を作成：愛知芸術文化センター『愛知県図書館事業年報』平成18年度。<http://www.aichi-pref-library.jp/nenpou/h18/h18nenpou.pdf> (last access 7/31/2007)

注12 トッカータ社内作成資料(私信)による。

注13 日本レコード協会「CDレンタル店調査」2006年度。
<http://www.riaj.or.jp/report/rental/2006.html> (last access 8/1/2007)

注14 調査の報告は、下記の文献に詳しい：加藤修子「音楽分野における情報要求と図書館の利用：音楽研究者と演奏家の比較を中心に」『図書館学年報』vol. 36, no. 3, 1990, pp. 108-120.

松下鈞「音楽研究者の主題情報へのアクセス行動と音楽資料：音楽情報へのアクセスをめぐって」『情報の科学と技術』vol. 54, no. 7, 2004, pp. 363-370.

注15 国立国会図書館「レファレンス協同データベース」<http://crd.ndl.go.jp/jp/public/> (last access 8/1/2007).

RISMプロジェクトの現状——アインジーデルン国際会議を中心に

樋口隆一（明治学院大学）

2005年10月に明治学院大学で開催された日本音楽学会第56回全国大会において、筆者が「日本の音楽資料——収集・整理と研究」と題するシンポジウムを企画したのは、若手研究者の皆さんが、意外なほど「南葵音楽文庫」をはじめとするわが国の音楽資料の存在をご存じでないことに愕然とした経験があったからである。

幸い、シンポジウムの反響も大きく、「国際音楽資料目録」(RISM)への日本からの働きかけを、もっと活発にすべきだという意見が、各方面から聞こえるようになった。すでに国立音楽大学図書館は、長谷川由美子氏を中心に、同館所蔵の手稿譜や初期出版譜の書誌データをRISM本部に送られ、非常に喜ばれている。私自身もシンポジウムの準備作業から出発して主要資料を概観した「日本の洋

楽資料コレクション」(明治学院大学『藝術学研究』第16号、2006年、61-68頁)や、それを海外に知らせるために書かれた"Handschriften europäischer Musik in japanischen Bibliotheken"(Festschrift Otto Biba zum 60. Geburtstag, Tutzing 2006, S.665-670)のような仕事を重ねることができた。

2006年6月には、音楽文献目録委員会(RILM国内委員会)委員長としてヨーテボリのIAML国際大会に参加したが、RISMのセッションに顔を出したところ、『新バッハ全集』の関係で旧知のクリストフ・ヴォルフ教授が新会長(2004年から)として登場し、さらにはフランクフルトの本部の財政難が報告されたりして、RISMプロジェクトは私にとって急に目の離せない存在となった。そこでたまたま同年8月にDAADの招待で予定されていたドイツ公式訪問の日程に、急遽フランクフルトのRISM本部訪問も入れてもらい、クラウス・カイル所長からいろいろと苦労話を聞いたりして、いまRISMプロジェクト全体が大きな変革の時期を迎えていることを実感できた。

ことし2007年は、まず7月1日～6日、シドニーでIAML国際大会があり、さらに7月10日～15日、チューリヒで国際音楽学会(IMS)の世界大会が開催された。RISMに関しては、シドニーでも報告会があったが、7月13日と14日の両日、チューリヒ近郊のアインジーデルンでRISM国際会議が開かれ、これにも招待されたので、はからずも両方に参加することができた。

アインジーデルン修道院は、かなり辺鄙なところがあるので、どうしたらよいのかと思っていたら、直前にスイス支部RISMからメールが入った。「8時12分チューリヒ発の汽車に乗り、ヴェーデンスヴィル駅で降りなさい。迎えを出すから」。半信半疑でそこまで行くと、知った顔がいたのでホッとした。RISM会長のクリストフ・ヴォルフ教授に、IMSチューリヒ大会の実行委員長であるチューリヒ大学のハンス・ヨアヒム・ヒンリクセン教授、そして6月にライプツィヒの『新バッハ全集完結記念式典』で会ったマインツ科学アカデミー連盟のガブリエレ・ブッシュマイヤー博士の3名であつ



アインジーデルン修道院

た。マインツ科学アカデミー連盟は、RISMプロジェクトのメイン・スポンサーである。

ヒンリクセン教授とは、昨2006年9月にウィーン・シェーンベルク・センターで開催されたシンポジウム「シェーンベルクとモーツァルト」で知り合ったばかりだが、なんとスイスRISMの会長も兼ねているという。つまりわれわれ4人だけがチューリヒのIMSとの掛け持ち組だったわけだ。用意されたタクシーでアインジーデルンに着くと、RISM事務局長のヴォルフ・ディーター・ザイフェルト氏と、スイスRISM所長のガブリエラ・ハンケ・クナウス博士が待っていた。話してみると、ザイフェルト氏は、ミュンヘンのヘンレ出版社の社長だそう。そういえばRISMのカatalogはヘンレ社から出ている。



左から筆者、ハンケ・クナウス(スイスRISM所長)、ヴォルフ(RISM会長)、ヒンリクセン(スイスRISM会長)、ブッシュマイヤー(マインツ科学アカデミー連盟)

修道院内に用意された会議室に行くと、すでに30数名の参加者が待っていた。彼らは前

日から来て、現地のホテルに泊まっていたのである。名簿を見ると、さすがに主催国スイス各地からの参加者が多いが、パリ、ルーヴァン、ワルシャワ、グダニスク、ミュンヘン、ドレスデン、南チロルのランゲン、インスブルック、プラハ、ブラティスラヴァ、ストックホルム、ルガノ、デン・ハーグ、モスクワからも来ている、アメリカはヴォルフ会長とアリゾナ州立大学のジョン・ハワードの二人だけだった。つまりこの日は、各支部の代表者のみの内輪の会だったようである。日本はまだ支部がないので多少肩身が狭かったが、ヴォルフ会長からは「日本から来てくれたのは初めてだ」といわれ、皆さんからも非常に歓迎されたことだけは確かである。

主催者であるスイスRISM会長のヒンリクセン教授とRISM会長のヴォルフ教授の挨拶の後、スイスRISMのハンケ・クナウス所長が手短かにこの国際会議の趣旨について述べ、フランクフルトのRISM本部所長のカイル氏による基調報告に入った。その要約は次の通りである。



1) フランクフルトのRISM本部は1980年以来、その財源を主としてマインツ科学アカデミー連盟から得ている。同連盟は一時、2008年度をもってRISM本部への補助金の支給中止を打ち出してきたが、折衝の結果、かなりの縮小を前提に継続が決定した。しかしこれは2009年度以降の人員削減を意味し、本部の活動内容に変化を余儀なくされる。

2) 新しい入力プログラム「カリスト」Kallistが開発された。これによって、各支部は本部とインターネットを通じて直接連絡を取りながら入力作業を行うことができるう

え、支部間の情報交換も可能となる。「カリスト」の機能を解説するチュートリアルも開発中である。

3) Serie A / II: 「1600年以降の手稿譜」Musikhandschriften nach 1600 のCD-ROMの新バージョンは、2006年末にK.G. Sauer-Verlagから出版されるが、おそらくこれが最後の出版となる。同様に、NISCによるインターネット版データベースも同年末にアップデートされる。

4) Serie A/IIのデータベースを、バイエルン州立図書館による「ヴァーチャル音楽学図書館」(www.vifamusik.de)を通じて無料配信することを決定した。実現は2009年を目標としている。

以上はすでに、2007年4月のニュースレターによっても発表され、シドニーでも報告されたが、アインジーデルンでは特に「カリスト」についてより詳しい説明があり、その後の討論では、フランスとアメリカの代表から従来のシステムからの移行に関する不安が表明された。しかしそうした点も十分に考慮したとの回答ではあったが、まだ現物がない以上、いわば「絵に描いた餅」についての議論でしかない。

帰国後、RISMのサイトを開いたところ、(2)の「カリスト」のチュートリアルと新しいマニュアルがアップされていた。筆者は昨年のフランクフルト訪問の際に、カイル所長より旧版のマニュアルを入手し、明治学院大学大学院芸術学専攻博士後期課程のゼミで、ドイツ人聴講生を含む大学院生たちとその日本語訳を試み、そのあまりの煩瑣さに難渋していた。しかし新しい「カリスト」のマニュアルは、ずっと簡潔で分かりやすい。秋学期からはこの新版の翻訳を進めることにした。

修道院食堂でのおいしい昼食の後、午後のオープン・フォーラムに入った。すでに立派なデータベースを独自公開しているスイスRISMによる「スイスRISMデータベース」作成についての発表、西オーストリア・南チロル支部による同地方の資料に関する発表を聴いて休憩に入ったが、筆者はヴォルフ会長とともにチューリヒ大学へと向かった。5時からIMSの総会があり、筆者は金澤正剛教授の後任として日本代表理事に選挙されたからである。



修道院食堂での昼食です。野菜スープと豚肉のロースト。田舎料理がおいしかった。

翌14日(木)は、"IMS in Einsiedern"と題された学会の遠足があり、こんどはバスでアインジーデルンへと向かった。金澤先生と一緒に参加したのは「資料の解明と応用的研究——RISMの仕事に基づいたプロジェクトと研究成果」と題したセッションで、9時30分から12時半頃まで、非常に充実した発表ばかりを楽しむことができた。

聖歌断片の記述の問題、パレストリーナの作品目録の問題、ソレルのオペラ"Una cosa rara"の影響史を資料的に解明する試みに続いて、スイスRISMのハンケ・クナウス所長が発表したのは、《フィガロの結婚》の"Contessa perdono"を修道院で上演するために"Gloria Patri gloria filio"に改作したという興味深い資料についてであった。

RISMであれRILMであれ、カタログ作りだけでは補助金が出にくいのはどこの国でも同様らしい。スイスRISMは、カタログ作りの応用として可能な音楽学の研究プロジェク

トを立ち上げることによって資金調達も行っているようだ。学ぶところが多いと思った次第である。それはまた音楽学者と音楽司書の有機的な連携を前提としている。これもまたわが国の今後の課題である。

ホテルでの昼食の後は修道院の見学。特に、修道院図書館で披露された聖歌の資料は興味深かった。修道院の大広間で行われたバーゼルの若い古楽器奏者たちによる音楽会



古い聖歌集を前に、左端は聖書研究の権威ユグロ教授

では、午前中の発表で紹介された《フィガロ》の改作など、スイスの修道院ゆかりのレパートリーが並び、音楽図書館学と音楽学、そして古楽演奏の理想的な連帯が示された。

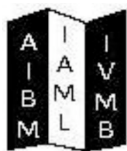
チューリヒ大学で開催されたIMSの世界大会のテーマは「推移」Passagen。例によってもものすごい数の発表が行われたが、筆者は自分の専門に近い「バロック・オペラ」や「1700年前後の教会カンタータ」などのセッションに参加して学ぶところが多かった。久しぶりのドイツ語圏での大会ということもあ

り、ドイツの若い世代の研究者たちが大勢やってきて、新しい研究成果を披露してくれたし、日本からも若手中心になんと7名も発表があったというのも嬉しいかぎりだ。『新MGG』の完結記念式もあり、バーレンライターの社長夫妻とも初めてお話しすることができた。6月には『新バッハ全集』と『新モーツァルト全集』の完結記念式典がそれぞれライプツィヒとザルツブルクで行われたこともあり、音楽学そのものも「推移」の時代



修道院教会の天井画。本当は撮影禁止だけどきれいでしょ？

にあることを実感した。



事務局だより

♪例会予告

今年は秋の例会を、音楽学会、音楽図書館協議会との合同で開催すべく準備中です。3団体が一堂に会する初めての機会となります。ぜひご参加下さい。詳細は、ホームページおよび、近日中に別送予定の例会案内をご覧ください。

テーマ：「日本の音楽資料・情報を考える」

日 時：11月10日（土）

13時30分～16時30分

場 所：東京音楽大学A館A100教室

♪事務局への連絡

IAML日本支部では、日本近代音楽館のご好意により、同館に事務局住所をおかせていただいておりますが、同館には事務局スタッフが常駐しておりません。郵便物などのチェックは遅れがちになってしまいますので、お急ぎの連絡は、事務局長の長谷川由美子まで直接お願いします。



♪編集デスクより

ニューズレター第31号をお届けします。7月に開催された国際会議の報告です。会員の樋口隆一氏からは、国際音楽学会の報告もお寄せいただきました。美しい写真がカラーで載せられないのが残念ですが、HPではご覧いただけますので、是非アクセスしてください。会員の皆様、灯火親しむ秋、次回の例会は、音楽図書館協議会、日本音楽学会との合同例会です。刺激的な発表が行われることでしょう。会員は勿論のこと、非会員の方も参加できます（勿論無料です）ので、お知り合いで関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、広く呼びかけていただきたく存じます。

関根和江

Newsletter—国際音楽資料情報協会日本支部
第31号

2007年9月25日発行
発行 国際音楽資料情報協会(IAML)日本支部
〒106-0041 東京都港区麻布台1-8-14
日本近代音楽館気付
<http://www.iaml.jp>